竹取翁物語

四

尾張小川
宜之藏書

竹取翁物語解卷第四

飛驒高山　田中大秀　著

杏雨書屋

成曜文庫

蓬萊の玉の枝

かぐやひめ石上麻呂に、蓬萊の玉の枝をもとめよとこゝろの許（モト）よりこゝ
ろ見の果（ス）をひとゝぶらんとて宮ゝまふをこゝろまうけ
く何のまゝまのあるまゝまとおもふこゝろ乃ふまうやう
蓬萊（ツバクラ）の玉の枝（コヤスガヒ）安貝とこゝむ玉ゝなるまと宮ゝまふ

○石上の麻呂ハ姓の下の字を舟て訓べし抄本まもろふ類本
まもろうハ行り其外の本ゝまろうちまろうちなど皆誤ま

と今改つるよしハ上ニ妻屏の段ニ麻呂ふでと
みをふりと誤てよりふりおぞと名と心得て此も脱ふりと思て猥
に補ふるなれば今削去つハ字ハ類本ニよれり○家ニつこもる
ふをみとどもハ大伴大納言の我家ニ有と云る人を召集てと宣ひ
し同意を此ハ詞を更て語ふるなりさてけらるるハけこのふる引
の約ふしと云と同じく男共の方ニ就て云言なり中納言の使ふ方
なりと云るふあるべし○燕ハ巣くひるべハ和名抄ニ孫愐切韻云
鳥巣在穴曰窠音科在樹曰巣音曹訓須一云須久末。宇治拾遺巻六ニ鷹の巣咋ふる
を見付て云ふ鳥の巣造をすふと云ハ木枝ニてこそ塩土など
ハ咋持来て造ふ然云なるべし○まてハ諸本ニ又用など誤を

と下ニ役て改つ料字の音なり字書ニ連條切量也度也數也
云又人物枝質也杜甫詩山色供詩料俊陸卷ニ右大将景政北山の空に迎ニ物しるふ処ニ
女の料ニ袿一重小褂差貫子ハ料ニ絹の差貫摺狩衣袿袴など裏に
入云などなり○子安貝ハ類本古板本ニ何處も子安の貝と
の字なり抄本此ニハなし末ニ有処も有り今ハ无き本をとる
をとども答まるに弟ると云ふ子うまるよ初ものいのぐらいぶよん
ものなりるぶし子うまるよ初ものいのぐらいぶよん
ちちくと申人ぶよ又ハ産ばうもめとまるに
○鷲を数多殺と見るよぶるハ男共子安貝ハ腹中ニ有物と心
得かと申なりニ字類本に役て加○但しハ徒と云言の轉ふる

意この字書より但徒亶切徒也凡也任從也又空也云〻本訓裼偏脱衣袖也
借為語辞〻なり言意ハ凡と云より似たり○子産と紀云〻ハ腹を割〻
見て〻も然云べき物ハ死ぬ時ぬ子産〻ハ何様して〻の出たる〻
となり○たゝくと申此言上四字類本〻ハたゝくと一写本たゝ
くこの字なし古板本たゝくと校本たゝくるなり抄本普本〻ハ此四字
なし出ぬと申と読なり必誤字脱字あべし左右より考ぬべし未思得若ハ
と申の三字衍して一写本のたゝくとなる宜〻て巣より集〻る燕
ぬ人より怖て飛散さまなんと思へべ猶言〻ぬ心ちして故又按
まはたべ〻めと申ものハとみけんをはを脱しくらを下上より又ハ引
まもらハくりめをこの字誤下よりものハを脱きるまもなんこの是ハ
も乱ふ字なり

試より云ぬとさきぬべ善本を得むまで姑〻然訓おきてんこのし○人ぶ
より見まバ」ハ燕ゴの人を又ぬバ驚て失去なり燕を人ゴの見ると云意より何〻ゴ
又ひ〻ぬまよ〻んやう〻ぬ於ねみゐゴこのそこの飯この〻〻屋のむ〻ぬ
はたべ〻のあなごとよ為るハすゝひくゴりそぬまよ之なゝまをのこ
ごゴびみる〻まるまをて」のゴ〻をゆひ〻あゴ〻このゴハをまをう
そ〻〻ぬ子うまゴそ〻ぬやハさてこをはぬ〻あとまゝた
○大炊ぎのとこ」ハ和名抄より大炊寮於保乎乃豆加佐〻なり。按より大飯の義なり
ちバ假名於保比と為べきと為〻あるハいこの〻傳写の誤この〻と思より
扶桑畧記七より一條天皇寛和二年十月十日圓融法皇幸大炊河云〻と
作るを日本記略〻ハ同叟を遊幸大井河〻〻〻即都西の大井川な

と當時既くに比と爲と亂くに聞えしあ又比と爲と通ふ例あるこの紀と爲と通ふ例あり未考○飯のしくしくは飯を調を云と今俗ものメシタクと云ものと同じ炊爨をかしくくと訓字鏡ものに燗之善反上炊也熬五高反煎也煎魚伊比加之久熬鳥菜等也亦留又伊留盭也五到反熬也熟飯也奈戸又加志久くとくくるり○屋の棟ものくのあなどくに燕を巣すくひそくぐと」は活本ものくをくくくくも解べものくべく諸本もべるとあるを今改つ。今世にくくと云物は柱の外ものに屋の頃くるなどくべ支ふる物を云と其くは非じ又にくくはくろの誤ものくに和名抄ものに功程式云東柱豆賀波之良くにある其の穴毎ものに屋を建る時東柱ものに穴を穿て立て後は不用なて大仏殿の柱の如くものを物欠さくなど燕は穴くくに巣くふ物にあくべ。故狩按ものに燕の巣は屋の内なて鼎の上なり然は壁ものに烟を出に穴なて燕も出入くに便よくくなくが其を擾ものに穴などくに巣くくるなるべくものに狩按ものに飛騨山中ものくに農家の屋の梁より上ものに簀子を敷くに二階の如く搆くくに冬は烟草など乾ものくべき類の物を置夏は蠶を飼処をくくしと云と若は古代くで梁より上を云名くく敷物なき屏をくくしと云けもの梁より上なくば棟近き処ものく軒の方くくはなしくくなくば屋の棟くくくくも合ひ烟を出に穴も有くき處なり火爐の上ものに鈎くくる物をあまと云古名も斐太ものくくくくはくき遺ふれば其より上の処をくくしと云も古名なて」くくくくはくくしの誤ものくくもの○まあなくくと男は繼躰紀ものに元年天皇を奉迎使敬憚傾心委命冀盡忠誠とものくくに忠誠は公ものに仕に心正しくに真実を尽に意なと。又遊仙窟ものに斂色言正其顏色有嗔容也をまあくつ眞成不謾言語也正首狩真成也をま

めやのと訓るハ戯て居ゝもしゞ腹立ゝ容を改心を正しゝる俗ハ真皃
ハ成と云如く〳〵異意なるゞの如くなれゞゞ正〳〵しゝる意一ッハ忠誠も
同意なり奉公ハ誠あて正しゝ心男をとなり○率て罷ゝハ此も
行方の賤ゝハあゝゞ對ゝる人を敬ゝ罷と云ハ○ゝのゞゝを結ゝハ
抄本て字なし古事記ハ胡床ハ吳床ゝゝを○ゝのゞゝと訓ハ和名抄
座臥具ハ風俗通云靈帝好胡服京皆作胡床此間名阿久良縣居大人揚座なゝ
ゝと云なしゝゞ此ハ常の胡床ハあゝゞ燕の巣ゝ下に假ハ揚り
居べき處を繩以て結ゝ作きるなり即ゝのなゝゝと同物なるべし○
ゝのゞゝせんハ令伺ハなりうゝのゞゝハ徒ハ見ゝハあゝゞ何ハ
ゝゝと其樣体を密ハ見る意なり竊伺を常ハいうゝのゞゝと訓をか

いまゝゝも訓ゝるて知べし。古事記大宜津比賣神の段ハ立伺其態爲穢汚
而奉進ゝ〳〵ゝり○そゝゝ燕子うまゝゝむやハ類本ハ子を
ゝりを字无ても宜し。多の燕あれば其中ハ子産の無ゝハ非じ
と云なり○きてゝゝハ然爲てゝゝなり
ゝゝゝ

と活く嘲咲方くし面白き方響る方ハ於むすしの略なり於むすしと
可書と田中道麻呂の説に従て師ハ定られつまで今ハ蜻蛉日記に
をのしを岡に云懸るによりて嘲咲も歡笑もをのしと云ハ唯笑
こゝろよて何れも同意くして然書つ是ハ人々の論に従て思定つ笑をゑむと云言
ちゝさとのえまゝと云ハ歡笑こゝろ也ちゝむと云ハ嘲笑のつなをど
もちゝむと云ハ同意なれバ其ゝ准ても知べきなり○とゝもハ道理
に合ゝ諾ゝる由に云ふ。玉篇に尤甚也最要也勝也最也尤也極也 㐭字をモツトモ
と訓ふ○えもゝざりけるとハ中納言かゝゝる方便ハ未寄思しとな
ふ○きよゝハ興字の音なり。字書に虚凝切起也盛也尚也ゝゝも師云
漢音キョウ 呉音コウ 上のをのゝゝ吏も有哉と宜ゝる同意なり。土左日記

二月九日渚院の条に今奥ある人所渚院に似ゝる歌よめるとゝなり○而なゝひ
ハ續紀の慶雲三年元明天皇即位の詔に是以親王始而王臣百官人等乃浄明心
以而弥務尓弥結尓阿奈く比奉輔佐奉年吏尓依而志此食國天下之
政吏者平長將在止奈 毋 所念坐云師の解卷一に云く阿奈く比奉も輔佐
奉と同意の言と聞ゝりかゝて言の然云本の意を考るに足荷な
るばし凡く足ハ人なる器も下に在く掲支持物なり荷ハ物を掲
持を云俗にハ拐の両端に物を著て擔をのこ尓なふとハいへども
其ゝハ限らざる吏なり。かゝまバ此言ハ物の足に掲支持ゞ如く臣
の下に在て君を輔持を云なり。和名抄造作具に麻柱阿奈く比道麻呂云
麻ハ庇の誤なるべし 小右記長和四年造内裏の吏を記さゝる処にも安奈

奈比結とゝのゝ昱宮ハ今世ゝ足代と云物と聞てゝゝり麻柱と書る字
ハいこのなゝまとゝゝ絲ゝゝも足代ハ扶揭て下を支持物なる故ゝぞ何
なゝひ云名ハ負ゝゝまゝゝと云ゝき。又今昔物語舊本廣澤寛朝僧正強力
語ゝ仁和寺の別當ゝゝ御けゝば彼寺の壞ゝる所を修理をんとて
麻柱を作て日毎ゝ匠ゝも數來て修理しけるゝ盜人我衣を剝ゝ
ゝけゝば盜人ゝ尻をふゝと蹴ゝりつゝゝば其盜人ゝ蹴らゝ仆
ゝ俄に失ぬゝなり云ゝ僧正彼ハ黑ゝ裝いつゝる男なりと宣へバ人數
麻柱ゝ上ゝて見ゝゝバ麻柱ゝ落をゝりて可動樣もなゝて云ゝと抄の頭書
ゝのゝり○揚居らゝゝゝゝゝハ下天羽衣の段ゝ番にすゝて守ゝん。伊勢物語
五段ゝ夜毎に人と居て守ゝゝゝゝゝ

おぼ〳〵しきまでふるかのしたのもとに女人たち〳〵まろ〳〵まろ〳〵に翁まろにやう子安ゐひとり〳〵まて〳〵居しあるとばくみばこのうまうきまて〳〵御返事あり〳〵家の経ばかり細き絵をかのそせ〳〵むのいたるを

○御返事を申ばかりの経ばかりハ諸本御字なし抄本このへし古板本申ふ経ばかり〳〵今ハ類本に従ひ○於ぞしめしかりハ類本に従て補ひ○ぞ〳〵ふと

ハ中納言此度に深く心を懸ひ〳〵片時も早く貝を得ん〳〵思食に思ひ如〳〵あ〳〵孫ば心を苦しあ悩ふなり○かのつのきに官人かい抄本にかのを脱きり彼ものとハ大炊寮なり○〳〵ほまろかい鈴木氏云此翁ぞ名付〳〵ハ〳〵ぞ〳〵のを取ふるの石作王ハ石鉢により月の岩笠ハ月の都に由〳〵聞ゆと云ふ〳〵るに就て按

に法ぞ〳〵を下上に爲〳〵るなるべしまてハぞ字なくまぞ〳〵もおろのまとぞ〳〵音通へぞをを畧ふるなと○申や〳〵云〳〵かい〳〵ふおろ中納言の御殿に翁く申詞なり○ひ〳〵ふひを合を〳〵かい親〳〵く物語しふふさまおろ。和名抄に楊雄方言云額五佰反和名比太比東齊謂之顙蘇朗反幽州謂之顙五各反。俊陰巻に入唐の別をしす処に父母としのげ悲しと思やるべし三人額を集へ〳〵血の涙を落して出立〳〵云又たのたの処に嫗翁子ども孫など居てかへべと集へ〳〵木を切こなたなど同じさまなり

〳〵はろろの申やう此翁に子やたごひかいのしくふぼこのうてかへ〳〵もおふなるをてかい又〳〵ふくふまくじあれひに於ぞろ〳〵〳〵廿人のひぶとたのぼり〳〵住まばのたく〳〵よる。

まゝでこびなり

○何しかあぐりてハ子安貝取ばなり謀の惡きゝなり○えとゝせ」ハ類本まえゝゝさせゝゝをハ術の○かぐろくゝゝハ驚く計り甚ゝ意ゝ聞也。帚木巻ヨ給の人ハ不見及逢來ハ山荒海の怒る魚の姿漢國ハ烈ゝゝ獣の形目ゝ見えぬ鬼乃貌なゝハぬぐろくゝ作る物ハ心ヨ任せゝ一際人の目を驚かして又馬頭の指一を引寄て咋ゝ住ゝを かぐろくゝしくかゝろくゝなゝなり○廿人の人。ハ上ゝ住をゞハ古板本ヨ役ゝ人のを補つ類本ヨ人ゝの住るなゝばゝをハ術なるべし。上妻向の段ヨ五人の人ハ下天羽衣の段ヨ二千人ハ人をゝを搭なり。俊陽巻三ヨ三人ハ人並居ゝ琴を弾ハ四三人の

人同ゝ云ゝ十三七人の人皆礼拜ゝて申さゝなゝなり○あ段てハ何らびあゝぶゝも云ゝ疎ゝ遠離意なり。古今集恋四に伊勢故郷ヨあゝぬ物也を我爲ヨ人ハ心の何段てを也。万葉巻二ヨ日並知命薨後舎人の哭ゝ島宮池の上なる放鳥何ゝびなゝ往ゝ君不坐ゝ十三ふゝひとの白濱波の寄もあゝべ何ゝぶる妹ヨ意つゝをるなゝゝある。慧ハ人ヨ怖く寄ハうぬを云ヨ○よるまゝでこびなる」ハ抄本ヨよるなし同本こびなりゝゝをなんと改つ類本写本ゝハなりなしよるハ巣ヨ依著なりまゝでハ中納言を敬ゝ云る更上四ヨ罷と云る同じ搭なりせをこゝふゝふべきやゝを此あゝひとこぼちて人ちるぞて。まゝなゝむ人ひゝゝひ何ゝこに裁すゝゝ繩をかまゝ

[illegible]

○こゝにもてハ先ヨ結〻造ヒし麻柱をゆ〻むを云ヒ、万葉巻八ヨ忌部首黒麻呂歌

秋田苅借廬毛未壊者雁鳴寒霜毛置奴我二、俊陰巻ヨ俊陰死後リ人もなよめのりと思ひ〻万の往還ヒ人ハ屋共もこぶち〻つまバ

枕冊子巻五五節の局を皆こぶちすとして云なゞ何り、狩下ヨ云ばし○人皆ちりぞけ〻ハ古叟記ヨ退字をちりぞき〻訓傳十四ヨろきハ遠離〻なり後方へ曾久を云〻何り、土左日記二月五日の条ヨもげど

もゝげどもちり〻へちりぞきヨちぞきて〻をハ字を略〻るなり、さ〻此ハ中納言の方ヨ付て云処なればちりぞけて〻云ひき処ぞ〻云ヒ〻を鈴木氏云理ハさる叟ゆゑの文詞〻ハ如此叟も有べき欤下ヨ麻柱をこぶち人皆帰ヒよ〻ぐ来ぬ〻ゆゑも理もて云バ人皆かへ〻しゆゑと不云でハ違ひ〻云ひき○人一人をハ類本一人ヨし○何〻こ」ハ抄本ニ字をたゞ誤まり、神代記一書ヨ鹽土老翁云作大目鹿籠内火〻出見尊於籠中投之于海云〻古叟記中巻の末に取其伊豆志河之河邊之節竹而作八目之荒籠〻を傳ヨ何〻〻ハ目の疎きを云〻ある○何ひぶに」ハ古板本間ヨ〻作抄本ヨに〻ゆゑもよろし今ハ写本ヨ役つ○綱をつり何ぶきせて」ハ按ヨつりハ釣りの誤なるば

し籠ハ釣と云へるを綱をとゝ云くハ[illegible]と不云ぐハ[illegible]この〇バクリ
と訓つ、和名抄蠶絲具ヨ唐韻ニ云緣訓久流絡絲取也と云へ縄葛なるべし
類の歌ヨ來るヨ兼くよめる皆是なり〇[illegible]「抄本ヨ[illegible]
なぐ類本ヨなん」とある今ハ活本ヨ從つ〇いやよ[illegible]更なり」ハ承引ふ
る答乃言なり、さて此く彼廿人の者どもハ麻柱を壊て帰べく仰度
しなふ更を略くり故次の詞彼者どもの心とも[illegible]る如く聞ゆ
中納言ハ方ヨ就く云すくハ麻柱を壊ふをく人皆帰くを[illegible]ぬと
なべき処なり〇「[illegible]ぬとこぼちて」ハ諸本こぼし人皆云くとあり
し字ハちを誤下まて字を脱るこの此言放と同格ヨ言の八衢ヨ
所謂左行四段こだし　右行四段こだち　に活用くり故先とそな

ふ
ち矢をそなつと云ばまをそなしもなん云く冠しのんやく然
もバ此も必こぼちてとあるべきと上のこぼちてヨ同じ。さて此言
みのつのくなる時ハ良行下二段の活こだるこだる　なるべき上ヨ
引る今昔物語ヨ彼寺のこだるる所を云。大和物語ヨ俊子ヨ宅こぼ
るる家ヨ。俊陽巻ヨ廿五下こだるる部のもくヨ。四十六ニ屋も皆こだる
たるるとなるあるハ星霜を經く自然と破壊るるく人の態
と壊ちるくハ何くび水のこだるく水をこだるなど云ハ別な
るヨ如くなるべく根本ハ同言なるべし故
今改つ
[illegible]
[illegible]

やうにたぐへるハ子うまれんとする人ハ尾をさゝげ七てび
あるゝとなるをなかゝるあるさてなゝぶびえぐゝ出をり
引あぐゝこゝをるあ貝ハをゝをゝ物ゝまゝに中物て
よろこびゝかまひゝ嘗物人すゝもゝ物ゝぐゝみゝのゝ佐
このゝよいまゝゝをゝみゝぐゝの中にアぐゝかゝるをひる
になゝゝてゝゝゝゝのくゝのまゝふ

○宣ゝゝふ」ハ校本ゝゝゝゝ

[illegible]

○悦[illegible]ハ写本ニ役[illegible]補フ○此ニ[illegible]ハ中納言の仕人[illegible]ヲ子安貝取難ニ[illegible]ヲ奉[illegible]相議[illegible]ヲ甚[illegible]喜[illegible]ハ前の龍ノ玉取ニ行シハ仕人なる[illegible]便く出立ざりしニ対[illegible]なるべし○願をかなふる吏[illegible]ハ写本ニ[illegible]しきとハ誤なると見ハ此謀ニ依く赫映姫を得ざるの願ヲ叶べきを悦ぶ由なり貝を得ざ[illegible]ハあべ。吏の憂しさと結べふ語格宇治拾遺巻八ニ敏行ヲ夢ニ見

く友則三井寺の僧に許ニ行し処に[illegible]しおしるる吏の嬉しさと云[illegible]

全く此ニ同し歌ニハ此ニ字多し万葉巻三ニ[illegible]浪[illegible]ヲ[illegible]る[illegible]川音のさやけく瀧ゝ瀬毎ニ。古今序ニ咲花ヲ思付身の何ぞ[illegible]なき身ニ痛の入も不知て。後撰十四ニ逢[illegible]なる[illegible]の[illegible]る我恋を人目ニかくる吏の悲しさ又ごのさと云るも同格なり橋姫巻ニ後世をさ[illegible]ぐり知[illegible]の有難さ。古今十三ニ現[illegible]こそ[illegible]の夢ニさへ人目を守り見るの悲しさなど歌ニも詞ニも多[illegible]と○御衣ハ[illegible]と訓べし。祝詞式ニ御服春日祭御衣平野祭と書[illegible]と訓ト。袖をそで衣手なり衣桁をそ[illegible]の催馬楽高砂と云[illegible]も是なり○かづけハ令被なり字音ニ禄[illegible]と云ヒ玉枝の段可考。谷川氏云琵

琶行ヨ纏頭をかづけものと訓ヒ被物の義なり。下学集ヨ纏頭遊伎之賄
賂也トヘリトヒ。衣類絹綿など上より賜ヒ打被テ座を立ヨ
ヒ云名なるべし。大和物語ヨ亭子帝鳥飼院ヨリ玉淵ノ女ヨ物ヲヨ処ヨ
袴ヲぶ被ヨ物脱テ出テ者ハ座ヲ立ヲもつヒと詔ヒまひ
ヲ被バ云ク皆かづけ被バ被き餘て二間ばかり積てぞ置ヲける
ヲ。○さらに」ハ字書ヨ更古行切音庚隷省作更代也復也改也と
あらさらにと訓ヨハ復改の意なり○夜さりハ伊勢物語六十六段ヨ
朝ヲハ狩ヨ出立てやり夜さりハ帰ヲ来ヲ。催馬楽梯に
朝ヨ取よりさり取ヲ。ヲ。春さ冬バ夕さ冬バのきれヨ同
じうるべし按ヲさ冬ぞを万葉ヨ之在者と書ヲ。さりと同言ヨ
ヲ共ヨ時の意と聞ヲ。斐太ヲ。あしヲ。ヲ

なぐも
いつヒ。○此ヒのきヨよりぞことのふまひ。ハ此ハ彼と云意なり
歌ヨ是や此ヒ。ヲ。ぞヲ。と云る皆彼の意なり。こハ来きよと云意な
ヒ次下ヨ紙燭さして来とも同し。此衣脱テ賜ふハ中納言の御殿
ヨ。ヲ。吏なり。ヲ。ぼよりハ大炊寮の官人ヲハあ冬ど昼夜寮ヨ
と居ヲハあ。ど自ヒの私宅も在テ帰ヲもするなりなる又更ヨ今夜
彼寮に来テ此貝と云る態を助てよと宣ひテ衣ハ賜ひつるなり○
ヒのさしつ。いかきヒ家ヨ返し遣つなりと鈴木氏云ヒき。伊勢物語
八十二段ヨ御送して。ヒ。いなまと思ふヨ大御酒ヲまひ祿ヲまてまと
ヒのそさヒ。ヲ。ヲ。ヲ

[illegible]

○日暮ぬれば彼寮より於そこにては上より萬の人より知らるを密
より寮にいまして〻ある即是なり中納言先より來りひ〻ゐ帰りひ〻
今又更に来ふりひ〻ゐあ〻ず
○誠より」ハ抄本より字を漏せり○燕巣〻〻ゑり」ハ前より密に寮にいま
しとゐるより此に夜しも燕の巣作るを始め見りひ〻るゐ如く聞
るハいゐゐ又〻〻〻麻呂ゐ相議を喜びりそゐ其時より〻禄ハ賜
ぶるより附なく中間に賜ふるをいゐ。按より中納言〻〻ばあら
ゐ相議を悦びりひ直より其態夜と日より成て今取りふと云より書續けるハ例の先
云置文法なり此更上より云と ある御衣を被りりよも中納言の家〻〻より更
又麻柱を壊つ更も其を諾ひりよ処〻直より書つゐけ〻るなり燕ハ
いのなふ時より子〻む〻問りよも別時にあ〻ゐ。日暮ぬれば寮に

かくてこの事も密に寮にいまして共に同一時なるを再度云るなるとかりされど燕夜〳〵立回〳〵○こゝつまの下の字なく子うまん叟覚束なし

まりし若ハ脱きるゝ○申やゝまハ抄本に字補ふる宜し○尾をさきげくハ校本に従て改つ諸本をゝけてゝをハ誤なるべし○荒籠

う人をのきくハ古本に従つ諸本のぶきてとぶ字をハ衍なるべし○

鷲の巣に手を差入させくハ抄本此十一字を脱きり○物もなしと申

に此に字无てあゝまほしく聞も然きでみて悪にハあゝ〳〵○誰ぞ

こと於ぶらをまに此ハ落凹物語巻二に笛の袋縫べき人なくばハ継母せ

処へ持来る処に藏人少将笛の袋逢するに取ふたまへ人のおぶらゐまに

ぶとに手もふたゆるゝ〳〵にゆて煩〳〵ひて北方云へ豈唯今縫ゝと云

ぶとにある意ぶ〳〵能似ゝり。誰ぞ此更ハ爲得べきと思回らひに爲え

ひ人を不思寄と宣く御自已物〳〵ふなり○籠に乃ゝとくハ抄本に

役つ諸本のかりて類本入〳〵とにり○手をさゝげてハ健冬さゝげ

ハさゝ入に誤なゝまと云けきど諸本皆さゝげとある詞に尾を

さゝげ〳〵廻に合てとにの結ハ即さゝげに〳〵宜し○手に平める物を

はる時に云ハ類本にハさゝにる時云に字无しとにると上裏の段に歩駿

する馬を以て迎へさせ〳〵ふ時に云〳〵と同し語勢なり○翁さゝえ〳〵

ハ此翁とハゝ〳〵つまろを宣ふなり彼翁の謀計にする更なればハ其

許ぞ云如く貝〳〵態を爲得ゝり悦く翁を喚係く宣ふなり落凹

物語巻三日夜調度餅名にとぎ調得て悦処に云〳〵て嬉〳〵。又常に自誇をさ

ふち貌と云ふ　さて翁媼ハ中納言御自を宣つる　○綱を引すぐして
のゝしり思つるぐ然るハあれど　ハ釣上ふる籠を下さん〳〵ハ綱を延し遣べきを周章て却て強く
引過〳〵物を障なぐ〳〵繩の斷切るなり○綱ふるるハ切るな
ふ古く結糸繩なぐ〳〵斷切を絶と云ふ○すれそちハ類本〳〵紀ヨ抄
本紀ヨなどゝハ悪し抄ヨ校る一本そのそちゝあてヨ字なくぐ
よき。圓珠菴雜記ヨすれそちやどゝて同意なりゝを俗ヨ切ルト直ニ
切ルト其侭など云ふぐの如し。万葉卷八ヨ大神女郎贈大伴家持歌深〳〵ぎく鳴之
登時君ぐの家にゆゝと追しハ到りまとの。貫之集に春立すもれくもち
毎〳〵君ぐの爲千歳摘べき若菜なりゝと。續後紀ヨ嘉祥元年七月甲申
因幡國宇倍神奉授從五位下即預官社以國府西有失火隨風飛至府

舍將幡國司所請登時風輟火滅靈驗明白也。谷川氏云晉書載記ヨ登
加罪戮芥隠筆紀ヨ房杜傳登殺用唐律即時爲登即時殺之。博物志ヨ
即日ヨ登日と書ヨと云ヨ。枕冊子雪山段ヨ里ヨくも明る即大吏ヨし
〳〵見きゝやる。寄生卷ヨ宇治の中君中納言ヨ文ふらを於く後〳〵物し於そねを斷ふ詞〳〵例なく
びゆるきせふつるし悅ヨすなハちも參〳〵ふ保〳〵侍りしとなど
諸の物語書ぐ〳〵に即と云るも皆此意なり○やまとかなゝハ天
智紀ヨ大炊省有八鼎鳴。文德紀ヨ齊衡二年十二月大炊寮大八
島竈神火武主比命庭火皇神並授從五位下三代実錄ヨ貞觀元年正
月大炊寮大八島竈神八前授從五位上〳〵あり八島と云名八何なる義ヨ未思保和名
抄金器類ヨ說文云鼎和名阿之賀奈倍三足兩耳和五味之寶器也。まふ古史考

云釜（和名賀奈閇一云末呂賀奈倍）黄帝造也。燈火類。四聲字苑云竈（和名加萬）炊爨處也

とのゝ今俗釜とも加万と云ふ麁を加麻と云ハ釜より出ふる名

ゝ思人あれど然ゝ古ゝ釜を加万と云る支なしと師云ふ所○

のもさまに」ハ仰様なり面を上ゝ背を下ゝ墮落ゝ所ゝるなりあゝ腰

を打ゝふなり伊勢集に「のらるものに君ゝ負くれし我なれや背なの

合ゝ人のなゝ」

人ゝ所ゝさまし」のゝ寄くかゝ所ゝ所ゝ同ハ所ゝ

ふし所ゝを人ゝ所ゝに水をすゝひ入ゝるゝ所ゝるゝ所ゝして

息出ゝ所ゝ又釜の上ゝ所ゝ

かゝゝゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ

少し所ゝ所ゝ細ゝ所ゝ所ゝ子あ貝を所ゝ抱

ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ

と所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ

ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ古

○所ゝさまし」ハ驚ゝる意なり上玉枝の段ゝ委云ふ○かゝゝ

まつまり」ハ抱字をかゝゝ訓ゝ唯いぶゝゝ訓ゝ唯いぶゝゝハ少

意異なるべし」かゝハ搔ゝて掲て抱ゝゝの義なりと聞ゝ言の八

衢（波行下二段活）ゝかゝふるハ竹取物語ゝ云蜻蛉日記ゝやどのてのりてか

かゝゝ物ゝゝ楚王夢卷ゝ泣ゝかゝゝゝ所ゝるゝなどゝ云

ゝかゝふかゝふるかゝふゝと云る見あゝゝゝ所ゝども活ゝ例

なり也行二段の活まく〻かく〻由と云言和訓栞〻ハかのゆゑと出きり落凹
ゐと思へど狩〻の活言なるべし〻行り
物語巻二ゐ部屋ゐ〻典茅助ゐ言ゐ御代ゐ翁ゐゐやまめとかく〻へ〻ちり〻行り
○御目ハ白眼ゐ〻ゐゐと云ハ氣絶〻瞳の上ゐ〻るなり○御口ゐ水を
す〻ぐ入まる御口ゐ三字今補つかく〻ふ時面ゐ水吹更ハ昔も今も
ゐる更なり此ハ救入まるゐゐもバ必御口ゐと不云でハ不調水を
口ゐ入面ゐ濯ぎバ氣を驚うし〻蘇生ぜなり伊勢物語五十八段ゐか
〻て物いふ〻病〻死入ふりぬバ面ゐ水〻ぐなぐして息出〻
云宇治拾遺巻三ゐ鳥羽僧正國俊〻戯する処ゐ僧正ハ例の更なぬバ衣脱ぐもな
〻例の湯殿へ入〻えさいのさふ〻りふすよと云〻湯槽へ踊入〻
のまきまにゆくりもなく〻臥ゐるゐ碁局の足に國俊ゐ入ゐるなり尻骨を突

〻死入〻差反臥ふりけるゐ近〻法のふ僧より〻見ぬバ目を上に
見附て死入〻寐ゐゐと云へいのり〻ゐもそび寄〻面ゐ水
吹なぐして上ぐりみそぐ息の下ゐ云ぬ〻ふ此戯ゐゐは
〻ふ〻のゐとふりゐる此〻能似ふり○から〻じて云ハ此〻在合
ふる人〻甚く骨折〻や〻〻〻て息出ぬるゐなり伊勢物語卅九
段ゐ今日ぬ入相ぐのり〻絶入〻又の日ぬ戌時ぐのゐゐなる辛じ
て息出ふりける菊宴巻ゐ源宰相物思ゐ死入ふる処に辛じく息出〻息の下ゐ物
云なぐ〻〻ゐと○又鼎の上より〻〻てさげおろしまる〻と云ぬバ
息出ぬぐりし先ハ鼎ぬ上に其侭〻と人も登て抱なぐきしぬ如
聞ぬぬど是も綱絶る即と云より直ゐ抱へ水を口ゐ入なぐする方

語續(カヤリヅ)けるゆゑ〳〵鼎上より下し(オロ)給ふハ其より前なりし事を於
〳〵語まるなるべし故ゆ辛じて息出ぬ〳〵と云と辛じて御心
ちいでゝと同一時ゆゑ〳〵辛じてと云ニッ(イル)などの一つと聞えて然
給ハ息出ぬ〳〵と句して次の事を云ばゆゑ於へるゆゑ〳〵ハ傳写(ウツス)
ほゞに次文ゆ續ぬをいぶかりてさゞめらせし物ゆさゞめろし
ハ共ゆ同意なる事を例の重ねる言なり○御こゝちいでゝ於ぶ
ちゝゆゑと於へ給ハ云〳〵於ゆゆるなりと答ふと云意ゆ係まり古く
病をこゝちと云けるを此ハ只御心持なり夕貌巻ゆ某院(ソヽ)ゆ夕皃君絶入ふる処
ゆ わるう成氣色なり物怖をなんとり於〳〵をとせ於ふ御本上ゆて
いのゆ於ぶさゆゆにのゝと右近きと四ゝを此ゆ似ゆり○いきを下

ゆ〳〵ハ落凹物語巻二に女君悩ぬ胸乃痛く侍給ハと息を下ゆいふ。猶
ふる処〳〵
菊宴巻上ゝ引ふるを可考○物を覺ゆ給ハどハ落凹ゆ女君唯今更ゆ物なん於
ぼゝぬといゝ給ハゝゆり○腰なんまごゝを給ぬハ類本ゆ從ゝ改つ
諸本うとゝを給ぬと誤まり下ゆ御腰ハ折ゆけとゝゆり。和名抄ゆ説
文云腰於宵反或作腰和名古之身中也。遊仙窟云細腰支師説古之波勢。玉蔓巻ゆ長谷詣ゆ歩疲
ふる事を足の裏うごゝの給ゝ〳〵ゝあり○先たゝゝくさ〳〵て來(コヽ)ハ抄本ゆ字を
脱をり。夕皃巻ゆ物氣出ふる処ゆ宿直人於〳〵てたゝゝ差〳〵ゆまと云へと
宣へゝ。宇治拾遺巻九ゆ醜き聟取ふる処にさて面(カホ)ハいでゝ成ふる〳〵ゆとく脂燭(シヅク)
さゝて人〳〵見給ハゝ。和名抄ゆ雜題有紙燭詩紙燭俗音之曾久。江次第ゝハ
脂燭と作とこハ下知の言ゆ〳〵來(キヲ)ゆとゝ云意(ゆとゝも同意)なり。古今恋四

月夜よし夜吉と人に告やらでこてふは似るり不待鳴あらむ。
小世繼物語に螢の飛ぬるを彼とこと此童は宣しけるバ
こぬと〇此貝の原文に「諸本ちそくさしてこの貝と書る所
バ讀誤るを本居翁上のこハ來ゆく向こを此貝と讀べしと云遣
さる所きさてかゝふ物に貌などハ云ばくもあゝゆ吏なる所ど幼げに
愛親しとて斯のゆふなり阿陪の大臣は唐國の方に向て何物ぞ
すこゝて伏拜ひしに似たる意ぞなり〇御くしもゝげてハ卧
なゞら頭ぞうとを持擧るゆふなり頭を御くしと云吏古くハ見え
ぶ此比より其吏なるべし師云和名抄に首加字倍頭訓同上一云賀
之良とぬまど又顱加之良乃加波良髑髏比登加之良なゞもゝく加

之良と云ぞ正しき名なる美久志と訓ハ凡く貴人のをバ後ゆも加
之良とハ不云で然云めはど久志ハもゝく髪の吏ぞくしけづると云
も髪をけづるなりさて髪をけづる具なはバ櫛をも久志とハ云歟
其ハくしけづるとと云べきくと畧て然云ハ譬バ庖丁ぢはのふカなれ
ぞ庖丁カなるをやどの其をも庖丁くはこもいひ田子の持桶なはを
ハ田子桶なるを田子と俗の云も同じさて髪のある処なる故に頭
をもこゝくしくハ云のかゝべも髪方なり然ハぬまど櫛の名ハ甚古
けはバ此を本にく其を刺処なるあに髪をも頭をも云はるべしい
ゝまは頭を云ハ古語なゝじと記傳巻五云はるゝ〇御手をひろゞゞ
ゝふまに」ハ握ゆゝる指を起し開ゆゝるなり指折を手を折と云ゞ伊

勢物語十五段の歌ニ手を折てゝとよめり○燕のあとおける古屎を云ゝまるゝハ屎するを云今も斐太山中人然云ヒ屎のまりも是なり又屎尿するをひるゝゝゝゝゝ云ヒ和名抄ニ痢を久曽比理乃夜方比霍乱を之利与利久智与利古久夜方比とあり。古事記ニ屎麻理散書紀ニ送糞蘇摩屡万葉十六ニかゝゝゝゝゝちのうゞゝ苅そけ倉建ヨ屎遠麻禮くし此云俱けゝゝる刀自此鶯の屎おりし後日数ゝゝ能乾て平めニ成ゝゝるなり

そゝをつゝゝゝゝゝひゝゝゝゝのちのひなのゝゝゝゝゝ

なりにけるよりも人の中にはまさりて思ふまひ
きなればるべきよりもやとこそ思ふるよりも人間まづこの〜おぼえ
ありまくり

○貝おもしろくと見ひらるに云〜ハ彼古戻を実と貝と思ふして
爲得〜ちと悦ひしの其御心持ふぶひ〜るなり○唐櫃の蓋ハ入
らざりふべくもしろくハ蓋ふぶにとをけんをるると云言重ふ
ば一脱しふる歌上ハ玉枝を長櫃ハ入らざるる如く此も子安貝を
取得て赫映姫の許に速送ふん料ハ兼て唐櫃を設置ひつるの
子安貝を得〜ちと思ひ〜ハ非で唐櫃の身〜ハ更なり蓋ふぶに入らる
ばくもあ〜ぶ設置ひつる唐櫃の不用なるる由なるべしと云

しを鈴木氏ハ如此物ハ唐櫃ハ蓋ハ入〜送る吏と見〜ちり唐櫃ハ
身を用ふハ大ハ過〜ふるべし此外ハ物の蓋〜入〜物する吏ども
ハ諸書ハ多く見〜ちりと云ふ。蓋に物入る例ハ枕冊子ハ祭の比
に青朽葉二藍なぶれ物ども推巻〜細櫃の蓋ハいまを云〜ハ下
ことをのしけ。續古吏談ハ宇治殿平等院造〜荘園多〜寄〜ふけ
る時所〜乃米を少しづ〜長櫃ハ蓋ハ蒔なべ〜ふ〜なぶ〜ふち。
此もさる吏ハそ有べき。猶按ハ櫃の身ハ大ハ過ふるべども子安貝ハ
甚小き物なれば蓋も狩大に過ふりもふるど赫映姫ハ其を以逢べ
物なれば吏〜しく唐櫃を設置ひふ〜ふて有〜ぶさて入らるふ
と云ふ〜いの〜貝を入ひ〜ふ〜ば入ひふば〜もこの入らる

ばくもとこの云べくいれられぬふと云くい中納言病身と成ひ〳〵物
よ入られぬふと云る如く聞もあちさせバ頭書ヨ禁中ヨ〳〵死亡の人、
などハ然る（サ）（ハ）類 框の蓋物なぐに入〳〵出ル例の〳〵其故吏（日本記畧の延喜八年夏）
雷ヨう〳〵ヨ〳〵夭死ヨし藤原清貫卿の尸を載半蔀（至陽明門）載車と
ある例を出しふちか〳〵ふ例ハ宇治拾遺巻十ヨ藏人式部丞貞高臺
盤ヨ額をあて〳〵死ふるを出ル処ヨ殿
上の畳なぐ〳〵舁出て出ぬヨバとあるを引ふ法ど然ヨハあ〳〵し腰
折ひ〳〵ハ歩（アユミ）〳〵ハ得帰ぬくざあ法バ物ヲ入られ〳〵この載られぬひ
〳〵〳〵ハ云ばふ法ど入〳〵法ぬくざ〳〵た殊更ヨ然云るハいとぐ若ハ
ら法ハさせとさ〳〵を誤ヨるこの此一件猶未うあく解得ざ法ども姑
鈴木氏の説ヨ従ら法をさせと訓つ○御腰ハ折（ヒ）ヨけ法ハ前ヲハ
腰なんうどこの法ぬと御自のふまくり○いとけふるもぐしてハ抄

本いとい〳〵ヨ普本い〳〵いけ写本いいけ類本〳〵ハき〳〵ふなど皆
誤ヨり校本ヨいヨけ〳〵ヨハ改ふるこの必いとヨるれ誤なる法バ改
つ此言いとけなしと云るも（なしてふ言ハ意无しはしふなしをた
ふるちなしをもれ〳〵とも云ふぐひ）ヨ同意なり。繪合巻ヨ秋好中宮
く同意なり。繪合巻ヨ秋好中宮の体を
ふ御ふるおひの〳〵ぶ〳〵そ物のづこの〳〵保の足〳〵ぬふけいぐもの〳〵
め源君のゆうし〳〵思ふ心ふ〳〵ヨ御けそひのこ深さおさ法バ云。赫藤壺（かゞや）巻
に上東門院十二ヨ上内の処ヲ姫君の御ものとき法云御形をこしげヨおそしま
ひおぶいぬ幼（ヨウナ）のるほき程ヨいさ〳〵このいとけ〳〵る吏ぬく云ものさ法
しひぬでおとなびさ〳〵せぬへと云。昱笠を考法バ心をさなくて思慮
もなく物する由なり。いとけ〳〵ハあ〳〵ぬ由を源氏に心ぬくひと云榮

花よりはなびさせなどふことをるなり。明らのなりと○やむことをは病更
をなり。古更記は火神を生坐く病臥在ることをやこことやきりと訓こと。尋常は
病ることは非で幼き態より爲出ひし病なれば恥ることを知きしとも
ふなり○其を病みるは腰を折ひし上に人の知らぬ更を心う
痛く恥ることは病ふあ又其の病となる由なり○ひみけりは類本
は字なし○貝を得ることは類本貝をもとは衍なるべし○云
よりも人は聞笑ぬと九字類本は脱きり。此より以下は上は云る
更を再委しく云るなり○日はるるくは日はるるくと云ばき格の
言なるを歌はも皆のく云例なる更師の玉霰は委云なり。恥しく
思ふに心日く弥増くいやぢ病の重くなれる由なり

ふることかぞへやる姫きてみるとふ
寄をくく思をくくるのはなしのまつのひなしとひくはまとて
のくなるを法くきとの
○とふくひはにのそしにる歌は諸本やる歌写本にる歌と誤きり。
姫の贈きるを受る方はくく云言なれば必はのそしにると云べき處
なり上妻問の段はやなぐもとき下は委辨ることを可考○哥年を經ることは
は待を松は代を貝は云よせ立よくねの序は浪と云をさて松は名
ぶくふ住吉の詞もてたふるるり。一首は意は前年は毎日毎夜
来通ひくを打絶くく久しくく立寄ひくべ我ゆのしこて待をべる貝
も无しと承ることは実くやとなり。古今恋五は久くくも成はにる哉住

吉のまつハ苦しき物ぞと有るを思ひ作るなるべし

いふとよるたこころちよ所もゝびけ〳〵人〻ゐのをとゝるを〳〵ゐる

きこゝちよからゝゞして書くまよふ

かひいのくをけるものをとゝびそゝとつゐるとゐをすゝひやふ

きぬとこのたゝるふとゐめゝ入ふるひぬ

○いふとよるたこころちよハ抄本心よゝをハちゝ字を脱きち。次よ苦し

きこゝちゝゐる二のこゝちハ唯心持悪なゞ云〻ハ異なり當時病

氣の叟をこゝちと云るゝて弱き病苦しき病よりゝくと云意なり。

貫之集よ蟻通の哥の詞書に馬のこゝちやとゝり見たゝぬ夢巻よ關白殿

御こゝちいとあしゝ御こゝち猶悪う思さるゝ事ハ御風よやなどと

思〻て〻御こゝち増ちもゝ病重く成ぬなり云〻○哥かひハ一のく

〻諸本一のくをなくと誤まり今ハ抄本よ從つ。抄よ匙ハ物を救ふ器

なれバ兼てよめるとと云ゝ。和名抄十四よ説文云匕早履切和名賀比所以取飯

也、兼名苑云匕一名匙是支反与疵同又音提見唐韻。あり。赫映姫情を懸て歌作く

同じ形ふゞの嬉しき形ばきめ〻ハ子安貝とゝん〻〻勞をし代ゝハ

此歌を得ゝりと悦び。其情を掛ゝゞ逢叟を聽しゝひて

よ恋侘〻將よ死なんとゝる命も延ぬべきに其を救ひ助くるヒハ

斯さぶこのよゝもゝを何ゝて救ひゝゝぬぞいのでゝ救ゝくよのしと

なり。師の言玉緒ゝ説ゝやそきぬと結ゝるハ一格なり古今春上よ櫻苍春

加ふる年ゞにも人の心よ飽きやそきぬ何〻〻飽きぬ叟ぞ飽きよ

のしと云意なりと云はるり○と書そつるとハ下のと字写本ゑ從
て補つ類本ゑたて〳〵云〳〵とある宜し。鈴木氏云此と字常言ゑもはるる
叉なり書終と一時ゑ云〳〵と云意なるべし〳〵と云はき。按ゑ書終即時と
云意なるはバ上ゑ綱ゑ登時〳〵ある同し語勢なり諸本と字なき
ハ若すれそちと云言脱なるもはんの○絶入ぬひぬハ息絶ぬ
ふなり。伊勢物語廿九段に云〳〵と讀く絶入ぬけきバ〳〵
こはをきく〳〵かるゝやひえゆしあくまとおがりしらうそはるる
なのすゝしとしらるはしきこゝひバこのひめてこハいひるる
○少しはのこはと思しけるハ姫を意侘く其叉ゑこゝ遂ゑ身を亡
しなひけるバあこはと思へふなり○少し嬉しき叉〳〵ハ後ゑ言傳

こる諺の意を云るゝハあはと訪歌を作く姫の贈まゝしを悦ぬふ
叉ゑく返歌ゑかひハのく有らる物をと宣ぬくふを云なり

狩のこゆき

さゝかるゝやゆこのゝちをゆめぐるはたゝをみこぐはとし
ゑゝて内侍ゆ正はふとこに詔くゆふ於行く於人の身を
いゆづくゝゑなしてはのそぐあるかるゝやひえハいこぐゝうの女
ぐこはゝゝくゝえこゝ茶はとのゝいまふ
○内侍ハ後宮職員令ゑ尚侍二人掌供奉掌侍奏請宣傳撿校女孺兼
知内外命婦朝參及禁内礼式之叉典侍四人掌同尚侍唯不得奏請宣

傳若无尚侍者得奏請宣傳掌侍四人掌同典侍唯不得奏請宣傳とあ
是ハ内々の御叟なれバ女官を以敕使々しなるべし○中臣氏
ふゝ子中臣氏ハ天兒屋命の裔なゝ中執臣氏義大中臣本系ハ高天
原初而皇神之御中皇孫之御中、執持伊賀志桙不傾本末中良布留人
稱之中臣者なゝあた依て此も天皇と赫映姫とハ中ハ立由ハ此姓
なる人を思寄しなるべし大中臣の姓ハ鎌足公の時藤原と改しか
ゝも猶中臣金連なゝあゝと記傳十五ハ委弁々ハ○多の人をい
ふゝなれゝて何そなるハ下ハ多の人殺ゝける心ぞとのゝあを
も同じ彼五人の人ハ心を尽し身をも亡ゝ恋慕ゝとても終ハ不逢
し其女ハ決ゝ尋常の者ゝハあゝじ容儀行狀何ぞのゝハ女ぞ見ゝ

叡ゝて敕使を下しなゝふなりいゝゝゝハ徒字註ハ空也又万葉巻一ハ無
用ゝ書て其意なれど此ハ下ハ殺てゝゝゝある同意なり実ハ此叟
ハよゝゝ堯なひしハ石上中納言計なれど皆いゝゝき恥を見なひ
て山ハ隠をなゝもゝなひしもなまハ凡ハ殺ゝと詔なひしなり拾
遺ハ何ゝれゝゝも云ばき人ハあゝほゝで身の徒ハ成ぬべき哉伊勢
物語廿三段ハ不相思でかまある人を留ゝ我身ハ今ぞ消竟ぬある
と書て徒に成ハけりと云るハ死し叟を云ゝ
ふゝ子とるけゝゝゝまるゝゝけれまるゝ何とゝなれまるハかしこゝまる
ゝゝゝ

宮てまはきつるまなをまゆみりつるとゝ[illegible]をさゝぶかゝとあゝしそゝべ
らをゝゝいひゝいとね

○まけるまそうゝゝ」ハ房子彼敕命を奉てなり○かしこまりて」ハ敕
使なる吏を承て敬恐こゝ請し入るなり○おゝれ」ハ竹取ゞ妻な
と諸本ゝな女と誤りつり校本ハ改ゝるハ従つ勅使女官なれバ翁ハ
憚ゝ嫗出て受るなりと○仰らるとハ」ハ勅詔なり○いゝハ」ハ優字の
音師云漢ハイウ吳ハウ或イユなり字書ハ放尤切優ゝ和也又寛也饒也なゞ伝のる
意りて手弱やのなる様を云なるにし○於そんゝなり」ハと字今補
つ天皇いまゞ赫映姫を見そなそさゞ人傳ハ聞食し吏なれバ其言
ゆゝてハいゞされバと字を補ゝ然聞ゆべし○かゝと申侍ん」ハ

嫗敕命を承て其仰吏の趣意如此ゝ姫ハ傳へまゝなりと字類本に
よりて補つ○いりぬ」ハ勅使の前を退ゝ姫の居所ハ行なり
かゞやく姫ゝとやこの御使ゝ尋ゝ[illegible]ゝ」ハかゞやく姫
よりて取なるあゝゝいゞゝ[illegible]ゝ」ハ[illegible]ゝ
なをみのぶゝ御使をバいのゞらゝ[illegible]ゝ」ハかゞや
姫ゝとゝるやゝとゝ[illegible]ゝてのゝまそゝ[illegible]ゝ思
ゝゝゝゝゝゝ[illegible]ゝ」ハ
あまゞゝゝゝゝゝ[illegible]ゝ
ゝゝゝ[illegible]ゝ

○ゝゝ彼御使ハ云ハ此上ハ嫗入ゝ姫の許ハ来て敕詔を告る吏を

省て直に姫を催吏を語まるなり○よれかゝちまもあゝべ」ハ上妻同
段にも能もあゝぬ形をゝゝと云ふ○うゐてもゐまふのれハ古吏
記 穴穂 大長谷皇子と市邊押齒未日出之時忍齒王到大長谷王假
宮段に王と狩しゐまふ条ゝ
宮之傍而詔未寤坐早可白也夜既曙訖可幸獵庭乃進馬出行爾侍人
等白宇多弖物云王子故應慎以上大長谷王の伴人ども忍齒王の朝
に申
なり〻ゐる此に似ゐ弖ばの字一補〻物のまふ〻改まと思つる
ど不然でも能き〻ゝ又此〻ハ調も悪ゐ弖ばさて置つ轉の解ハ上
龍首の玉に段に ゐり。姫ごいのごゝろ〻めべき〻と云るをさてハ敕に違へべて
あ〻〻ものゐまふ哉と云意と嫗ぞ如此云るなり○帝」の下に写本
君字ゐるハ衍なるべ〻○於ろのに」ハ疎畧なり○かゝゝや姫」の下

抄本の字ゐり○帝に召てのまゐまふ」ハ字ハ必誤と聞も故
姑と〻訓べ〻し○かゝ〻〻〻もべ」ハ帝に召〻ゐてハ奉畏く
違背すまゐ〻に由を嫗の申をバ姫ハ恐多吏〻も不思〻なり。又按に
帝王に召弖〻后女御に位に齋の弖ゐ吏を結構なる吏〻も不思と
云意なるべ〻し此のしてしと云言の吏上ちの段に云しを可考○み
ちゐ〻〻ゐ〻べ」ハ勅使ハ姫を見まゐて立させ〻弖つるを可畏と
も不思など氣薩を云〻勅使に所見べ〻なき様子なり○うゐる
子に段や〻ゐハ弖ゐ」ハ今ハ字を補つ写本にあ〻弖とあるハ若下上
に誤まるの○いを心をづうゐ〻げに」ハ鈴木氏云此に心恥のしと云
るハ俗に氣ヅカヒナはゐ氣ガオケル〻と云に當弖り〻と云まき。幼よ

足養育つるバ甚親〳〵我産る子に如くなれども実ハ我子に非ざるバ氣づかひ〳〵嫗の思ふ通ゝ云責もえをび〳〵れり。紫式部日記ゝ人〳〵を評する処ゝ和泉式部と云人ハ面白く書こなしけれ共口ゝいと歌ゝ讀るゝなれども筋ゝ侍るこゝし恥こしげの歌ゝとゝや〳〵おびゝ侍るべし〳〵ハ甚心深き人なるゝねバ心置るゝ寄人〳〵ハ不思ゝとなり。夕兒巻ゝ夕兒君死ゝ宮ゝ処ゝ尼君ゝそかゝ〳〵ゝ更なる諫らるゝを心をづこゝ〳〵なるゝおびゝ〳〵ゝ口固めゝ源君乳母ゝ令知〳〵ハ対面ー物ゝ時気進ゝ思りんとなり。○おろそかなるゝ〳〵に云〳〵ハ鈴木氏云おろそかの〳〵ハ疎遠ゝ親〳〵睦ましかゝぬ由なり。赫映姫已ゝ心ゝ不進ゝ常〳〵ハ異にて睦まし〳〵氣の置るゝ〳〵に搆〳〵居ゝを堀〳〵心の隨ゝ責〳〵ゝ得不勸なり

おゝ〳〵ゝ内侍ゝ伺ゝ出〳〵ゝ〳〵ゝ此ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

云置て其由を下に云るなり　二月七日条にも初て云ざまし物
哉初て云にも有哉と　をとゝも同し語勢なりそちをしき更
言を添て心得べし○此をさなる者ハ赫映姫を云と○こはくなる
者ハ古語拾遺に天鈿女命古語於須女其神強悍猛固故以為名今俗
強女謂之於須志此縁也と云て。をゝめける巻に　槿齋院の更を　故桃園宮にも然
心こゝろなる者に思ふ給まゝ過侍るしを〻なり今世にも心剛く不
美引を情ごゝろしと云と○對面すべき此字上にそや皆の言なる
ゆゑとゝ受る〻ハ不云格なるべの如し宇治拾遺に云ふ
と云ける者ども　此文天羽衣の段に委引つ　〻も上に其格の言なし下に言を
略する意なるべし○と申にハ對面すべきまで姫の言に其を
嫗とゝ受て姫の斯申と内侍に傳ふるなりさて地の詞に今一と

よゝと云べきと省ふり○はきに世に住ける人けるけるよそ
。ゆゑなでハ有なるやハ写本にうけなでとなりハ字を抄の異本
に従て補つらけなりハ聽と云に同じ此更を下にきくぼくも何
らぞ〻なりをはさに云有なんやハ伊勢物語卅九段に今は翁おとに為
なるやゝを同格なりやハやゝ　塗籠本にハ即やゝ〻ゝ裏に反る辞なる
バ来て出て所見ゆゝ云意となる○謂まぬこゝれもゆゝい
ゝハ上火鼠の裘の段に云つゝ志ゝまゝ云ゆゝの意なる更上龍首の玉の段に
云つゝ猶ひゝりごちまつゝなど云ハこゝしこゝの約まるな
ゆゝと云ゆと共に言為の意なり○詞をぞしゝ云ゆなでハ類本にそぐ
かゝゝゝゝ是ハ即國王のゝゝと云る更にゝ更に斂色ゝ言ぶりを改

く剛く恥のゝむふ由ゝ云成さるゝく恥ごのゝくと云ずも同かゝる
ばし宇治拾遺巻三ゝ本院侍従ゝ係想しけるゝ遂に不逢し吏を恥く平仲我なごのゝも世ゝ恥ごの
ゝくゝゝおぐくしゝこのゝと
こゝをゆゝくゝゝかゞやひるきゝべゝ。ごのゝ國王の仰ゝ
をそむこのゞをや敷しゝおひてゝとのゝし
○此上ゝ言多く省略ゝり。嫗内侍の詞を承く又姫の居所ゝ入く姫
ゝ傳ふゝ吏を畧て直ゝ姫の容躰を語ゝるなと○是を聞くハ内侍
の詞を傳聞くなり○はゝてハ本来不承引うゝ國王の權威を以
仰背まゝ由を聞て弥増ゝく心剛くなゝる容体ゝく地の言なり。
内侍の歛色ゝるゝ當ゝるなり○ゝくゞゝもあゝゞハ承引のまさ

まもなきゝり。字書ゝ聽他定切聆也静也受也從也などゝくふる意
ゝく熟く耳ゝ聞く心ゝ承引よしなり○國王のゝくゝや殺しゝおひて
よとのしと云ハ違敕の罪ゝハ死と賜ふゝもよしゝあり○かゝて此
下ゝ又嫗帰ゝ出く姫ごの答し言を内侍ゝ申きる吏を畧きり
此内侍のゝをゝるゝりくゝゝを葉ゝゝみのゞを別しゝゝ
おゝくゝゝ人を敷くくけるゞごとのしと沿ふまひてやこゝけまごとなる保
於ゞしめし。おゝしまゝ。ゝて此女ゝゝるゞばゝのゝるやまけまくゝ思ゝめし。
竹ごゝの葉をゝ見しく於ゝゝゝ
きかゝ保ゝのゝもよくくふゝゝゆしめしゝて御使をゝゞひしゝのごかひなく
ゝくゞなりにゝるゝかくくゝめゝゞ
ゝくゝゝやゝおくくゝゝべまく仰ゝる

○此内侍」このハ輕く添へる言と聞べし○そゝけハ皇國言うハま
ゝけまゝと云ハ音便なり と云ばまゝと奏字の音よかゝ云ア字書よ則候切人
臣言事章疏曰奏ゝ行り○多の人を殺してけるゝ心ぞこのし」此言ハ強
くゝる者ゐてと云るゝ答ひふやゝけ御言なり上よ多の人ゝ身を
徒よ成くゝと詔ひしよ同し○と詔ふるひく止よけ」ど」ハ多人身心
を尽くして恋慕ふをも竟よ不聽過し者なゝバ敕命なりとゝ容易よ
を承引まじと思食て一度ハ止ひけきどなり類本よ止にゝるを
ゝどゝあり○猶於不し之て」おそしはして」ハ諸本之しなし校本に
從ゝ補つ類本ハはしもなし再更よ思起しひふゝ事謀ひふなり○
此女の」を一本よ ゝ誤なりをゝと訓べし即赫映姫な

ア○謀ゝも負むと思食ゝ」ハ上よゆのゝ物と云るゝ赫映姫男に
つのゝじとゝくの謀支なアかゝくて彼五人ゝ人ゝ此姫の謀計よ皆負ゝ
空しかるゝしよ當て朕ハ負ひをじと強く思召立ひふなアと○竹取ゝ
翁を召ゝ」此一句難波人佐野春樹補べきよし云へゝゝ写本よ書加
ふるに從つ実よなくゝハ汝ぞと詔ひふ當なくゝ記こえべ諸本
脱をるゝ傳ゝ記るなるべし○聞食て又御使を賜しのゝなゝ天皇
ゝ大御詔ハ御自己敬言を詔ひふ叟下よ例を引ゝ妥云べし○かひ
なゝ」ハ態と勅使を立ひふし代もなく赫映姫房子よ不相見ゝやな
ア○かくゝるゝゝやゝなゝ記べきと仰らる」ハ勅命を輕くし
ゝ疎畧に心得習ゝべきゝ而ゝ必敕の如く姫を上べしとなり

師玉小櫛巻五云ふいぐ〜しハ本ふとくしと云ふを音便ゐくことをいと云なせる詞なりふとくしハ舌ひてて詞ふてなど云ふことゐて直ゐくしく横さまにゆどのふるやうに意なり万葉ゐ回轉(クワイテン)など書く曲まる道をふとくしる道などよめりと云ふき。按ゐ言ふ本意ハさるを夷なゐめど俗ゐ打ヤリニスルと云やうの意物を疎略ゐする意ときこゆ何ゐ(ヲ)吉ゐ〜ぬ夷なればハ此言アルベシジキなど訳(ウツ)をバ何にも當まるゐ如し。桐壺巻ゐ帝更衣の卒去を悲しミ給ふ処ゐ世中の夷をも思し捨ふるやうゐ成ゆけバいとふびぐしくもぎなりと人の朝(ミカド)に例ゐ〜引出さ〜めきけり佗(ヒト)の朝ハ唐玄宗の夷ゐ〜政夷を疎畧ゐ怠ひし由なり。夕貌巻ゐ行觸の職〜ひ〜ぬ夷を源君頭中将ゐ宣ふ言に甚ふふいぐ〜〜ひふなゐ宣ひ〜ど云

是ハ疎畧ゐ〜ひけを〜ど〜いふ意ときこゆ。又源君鳥辺山ゐ物しひよ処に馬ふて物をんと宣ふをふいだい〜ひ夷〜ふ思ふと甚軽〜〜〜有ゐじき夷〜ハ思へどなり。俊陰巻ゐ若小君の失にしを尋出ふる処ゐ大政大臣いつこの〜ふ心歩行(アリキ)ハ習〜ぞ甚ふんぐしき夷なり我心惑(ヒド)ふ〜愛〜ひ〜〜外する出〜ひをゐを父ふふふ〜〜責ひふ大臣の心を疎畧ゐて父の心を惑ふんと宣ふなり。大和物語に奈良帝岩手と云鷹を愛〜ひ〜〜ひ〜ゐ頑ひつふ大納言ふ〜〜〜しひふひて物も宣ひふ夷を奏〜ひふ処ゐ面を守〜せふ〜しふりと思召御氣色なり。など諸の物語ゐ多ゐるを考渡〜て知べし

ふのこ〜ゐりて〜ふ〜ゐ〜ゐ〜ひやゐ〜此めふ〜ふ〜ふ〜

○宮ばらの〻ハ天皇の大御前ゑ仕奉を云。然るを下ざまゑも云るハ後の変なるべし。宇治拾遺巻四ゑ今ハ昔、人の許ゑ宮仕〻て在なる侍何ゐなど云ゑ○もてわび〻ハ侍り」ハ諸本侍るとあるを上ゑてやゐ詞なるゑバ改つ翁も嫗も敕詔の疎畧ゑすべこの〻ざる由を聞く云勧(イヒスム)ゑでも不承引を甚憂(ウキ)ゑ持撹(モテアツカフ)ゑ〻を奏するなり。もべ〻ふハすこの〻と行通(ニキヨ)らば撹ひ悩(ナヤ)むを云なり○さりとも」ハ然有(シカアリ)やもなゑ。やそでも承引ずべきさまなれども猶改く仰の旨を云聞らむとゐり○仰ふまゝゑと奏に」ハ写本ゑ仰変ゑ〻ゑ。此詞脱字あるべし〻〻仰ふやゐゑ申侍るゑと奏に」と補ゑるまゝきしと鈴本氏是ハ古文の簡(ツヅ)く妙なる処で本ゐ侍る〻然心得べし〻と云ゐゑ

ゑを聞しゑ〻と仰ふやゐなるこの翁ゐ手ゑ於行しゑて〻ふらふものを〻〻まるせざ〻ゑ此女(ウナヒモシ)ゑ〻て〻ふ〻る物なるべきゐかゐ〻ふゑとなるこのゐ〻ゑ。

○聞食て」ハ翁ゐ申言を傳奏〻て聞食上ゐひ〻なり○仰ふやゐ」ハ勅詔を奏者より翁ゑ仰下(シ)ふなりゆゑ〻ハ類本ゑ従く補つ○翁ゐ手に」ハ下ゑ写やつこ麻ちゐ手ゑ写〻せて〻る子ゑ〻ゐ〻ゐと仰ゑ。後隋巻ゑ父母ゐ手を別ましし日よりなるゑ手なり抄本ゑ脱き〻ゑ○於不しゐて〻ゑ」ハ育(ダツ)を於ゐに云ゑ。万葉巻廿ゑ山振ハ奈堅都〻於保佐年在つ〻も君来ましつ〻かぎしゐりなゑとゐり。帝も造麻呂ゐ生る子なるぬ吏ハ知(シロ)し召く汝ゐ持く侍る赫映姫ゑ

翁の手に生立(オホシタテ)てむなどと詔ふぶと甚く強悍く養父母(ヤシナヒヤ)に心ろも従(シタガ)はぬ吏ハ未知(イヤシ)ろしなどさぬなかく宣ふなり○翁ハ冠(クワウリ)をなどこの爲ぞ

せざらまし」ハ類本を字を脱きり古板本一写本ハ給せと作るハ誤

よくせと訓べきの類本抄本ハふぐせと作るり何もよろしし。

宇治拾遺十一ハ貧女清水寺に願掛ける処ハ豆を給もまく御帳の帷を甚能畳て前

ろ打敷のると見くさぐ豆より外ハふぶき物の无ようて又

ほどろみ入ける夢に云く唯ふくん物をぞ給むでかく返し參らす

ふ怪(アヤシキ)吏なりて又給ぐるを乞る假名書なるハ唯ふだん物とを一なれど其ハ效く給字皆ふだと訓

べしくこのり冠ハ加我布理なるを和名抄ハ加宇布利と有ハ音便な

と。冠賜ふハ五位ハ叙きまくなると。小世継物語ハ勸修寺(クワンジュジ)内大臣高藤

公若のりける時栗栖野の鷹狩ハ急雨にたのひく大領官道弥益(ヤマヒニヤ)の家

に一夜宿ひく女ハ逢く産ひし姫君(ヒメ)子宇多天皇ハ娶まて后と

成ひ醍胡天皇を産ひしハ依て弥益をハ四位ハ成しひし故

吏ハ例を思べし

ふるとなるこぶくふふ哥(カリ)くかるくや姫にこのかくふやくかくなる

とかぶくハ作るみよくるハ仕(ツカヘ)まつりくみよはぬくいくで

○悦てハ冠賜くまくと有吏をなり○かくなるハ冠の吏なると○猶や

ちいかくハ翁てハ冠ひくまくとあくく甚ひでくるに吏なり其ようて狩仕

奉ひくぬの仕奉ひへこのしとひり此辞の吏ハ上子安貝の段ようぬる命

を救やくせぬと云歌の解ハ云〻

かるや姫こそ〳〵いはく申もとゝやもゝとゝのへ仕まつりしと思ふ
をとゝひ〳〵仕まつりせずそで消うせなのすずみつのとかゝつる
けさの〳〵まつりまつりとゝぬだとのうかゝる
○もゝ〳〵ハ師記傳十五云専ハ一筋に方よりて他義を交へぬ意なりに
用ふり全字一字をゝ訓る皆其意なり○強く仕奉るを強く消亡
なんずハ翁官位を得まゝ欲て強く宮仕を出し立れ共身を失ひ
命を亡ふゝ宮仕ハをゝしと思ふり此ハ消亡と云るハ常に死更を消入
れど云〳〵ハ異なて實に火の消雪とき申るゞ如く身體消ぬと先ロ
達云る意なり下に影のやゝまなり又本の形躰ハ成なゝせし術にて
ふと思べし〓なんずハ下天羽衣の段ハ近に人〳〵まゝどゝらんずとゝも同

じ未を係〳〵云置言なり宇治拾遺巻三ハ平仲来る処にて〳〵遣戸
を開なゞのゝ忘て來にけるとゝあて誰ゞの開なゞ〳〵ハ出ゝ〳〵るでな
ど煩〳〵ゝ更に成なんずるゝ〳〵帰らず程もゝまじ云〳〵著聞集巻十に
競馬のことを高遠と國文と定下さるけり高遠を云〳〵強力の聞ゝみを國文ハ
小男无力ゝ者なりけるバ疑なく取〳〵投られなんずと人〳〵思ふり
けるとゝなり○こけとのゝ冠仕奉てハ宿て宮の巻に源侍役の更をけとのゝかっ
〳〵ふとを人と等〳〵賜〳〓〳〵ふるけとのゝハ官かゝ〳〵ふるとハ位なり
〓字ハ翁を敬〳〵御官と云姫の宮仕ハ就〳〵賜ふ官位なるバ仕奉て
と云ふ○ゝゝぬだとのゝ〓ハ一旦勸ふ役〳〵宮仕けとのゝはつり翁の
官位ゝふるゝ上〳〵死だとのゝとゝ〓り上〳〵ハ消亡なんずと云

く此てハ常人乃如く死と云改めるなると
翁いとゝあるやゝ形ちなみよりひて仕のをかゝふるを忘れ
ものゝでハ何よのもせむとハあゝ是なゝが宮仕のをきをきゝ
ぢゝすゝ死ぬかぢよやゝやハあるべきゝとゝ
○形ちもまひてハ頭書ニ云勿爲ぬひをなり爲ハ姫の詞ニ官位仕
奉てと有と同じく翁の官位姫ゝ爲る由なれバ形ち先かゝ云置く
次ニ其由を云る例の文なり死ぬかぢとのり辭とぬふ吏なゝバ翁ゝ
官位を爲ぬふ勿となり○仕とのゝと」抄本ニ脱ちり○何てこのハきを」ハ
ハ字写本に從て補つ翁官位を得ぬりゝも我子を亡くハ代なき吏
となり○きゝハ有ゝも」ハ翁ハ猶官位を得ぬほしき執心ある由なると

○なぶゝこの宮仕をとゝぬぬとぢゝすゝ」ハ何故ニ辞と嫌ぬぢゝなり○死
ぬべき」抄本へき无そ宜き○やゝ有べきハと字抄本ニ從て
補つ死と云吏ハ有ずゝ吏なりと云るなり
猶ゝゝぢとのゝとけゝゝ猶つゝ翁ゝきなゝやあると見ぬ何ぬ
ゝぬ人のきつゝ猶ぢゝ形ちこのなゝぢゝすゝをむなゝなゝてし
ゝてあぬきのふゝ申ぬ猶ぬゝ形ちのを人ぎゝ
やとゝゝゝゝゝ

○猶虚言欲と云ハ翁官位ニ執心ありて強て宮仕の吏を云バ死計ニ
辞ずを虚言のと思召バ官仕ニ出し立て狩不死で居のと試ぬ実
ゝ死べきぞとなり○數多の人ぬ志云彼五人を誠ニ恋慕て甚く志

を尽しくみるほどなる空〳〵なりて不逢し其人〳〵に思ふを心も有更
ばり是ハ只昨今日に浅くなる更なり帝の仰更〳〵其に隨着べ
きにあらぬとなり○人聞やさしと云ぬ やさしと云言ハ恥うしに
意なり〳〵他の上を思ふ自己の心に却て〳〵方を云恥うしと云ハ廣
〳〵我身の恥なる更を思ふ意と聞も。或人今俗にヤサシと云ハ優に
雅ふる人を云ぬ其意を用ふ万葉巻五に玉島や此川上に家ハあれど
君とやさしみ顕さぬ有きと作る歌を松浦少女の大伴卿に對ふ君
ハ都の品高き宮人に於ては其をやさしと思ふにら我賤しき
家所を顕ふるぬ恥うしと含めるなりと云ぬ。大秀按に此哥に
て其意を聞も是ぬ打任ふハ然ふ云難うるべし廣く考ふに

に對人に心の却て恥うしと思を云と聞えるり恥うしと云も
心の於うる〳〵由に云るハ紫式部日記に和泉式部を恥うしげの歌
よ云〳〵ハ却ぬと云るハ心置る〳〵歌人とハ不思と云意なる
更上卅の〳〵に云るを也可考。万葉巻五に世間を宇之等夜佐之等思へば
も飛立の〳〵鳥にしあらぬ世間の人に心をわかるなり。古今俳諧哥に何をして
身の徒に老ぬ〳〵年に思を恋ぞやさしき身に積タ齢ノ思処が恥カシイと訳さるる
ぬ。真木柱巻に疑黒大将玉蔓君を語らひ給ふ本の北方に父式部卿宮の宣ふ言に今ハ然今更の
〳〵人を渡〳〵もてかしづくに片隅に人に流くて副物し給を
世人に心を置給ふ此に同し
世人に心を置給ふ此に同し
世人に心を置給ふ此に同し

く轉ずるなり。今帝お召よ應ずハ始妻問の段に世おかゝ人なるとも深き志を不知でハ逢ごのてしと云し心も此ゝ女御后と齋き傅の給ふを喜べる樣なる心根義理の正直ゝぬを世人も欺べけまバ其を深く恥ゝむ由なり今の世お諺もかゝふ樣なるを襟もを著とて憎む同し意ぞくなり

翁答ゝいさゝ天下おとゝ此もかゝるも此と存の仙やふさゝて大なるふけゝるなを猶此ゝまつるほゞゝよまを存ゝて申ともむとゝ

○此のあとゝ心ハてんゝと作る本ハ悪し天ごの下と云も悪し○此ゝゝかゝるゝゝハ全翁の官位お吏に係る答なをバ世界の吏ハ何樣まゝもと云ゝ身ハ尊ゝても界てもとなり○御命の危さこそハ抄本あやふきゝを宮仕よ出しゝてバ不死やあると見お仕姫の云を受ゝる答まゝさる吏ゝて試見ずハ君ごの命に係る大吏なを然危ゝふきゝ○猶仕奉まゝき吏をハ類本ま狩ゝゝと云ゝとまハ術なるゝ。此猶ハ俗よヤハリと云意なり○參てまゝさむハ内裏よ參てなり

まゝりゝてゝゝゝゝ何のゝふゝこのしゝとゝよ彼まゝはを家ゝを心ゝて仕まつまバ言ゝきゝゝ生ゝ見てなゝばゝぬばしゝとまゝゝた告ゝ麻ゝごの手に入ませゝる子まゝ。なのらばむのゝしゝふまゝ見付ゝるかゝを人ゝを人を不似ぞ

さてふとそうきそうに

○仰の叟ハ類本の字なし○かしこさに」ハ敕を恐畏ミ奉ル疎略
なる為奉らぬ由を申なり○彼ゐ〳〵も」ハ赫映姫なり○参ちきもと
て仕奉ぬ」ハ仰の如く等閑なゝ宮仕の叟を種〳〵勧め仕ま
だ〳〵云意なり○宮仕ま出し立なぞ」ハ抄本まなとお〳〵作ル普本同し必
誤なれバ改〳〵補つ。類本出をらゝとも誤なり○造麻呂ぞ手に云〳〵
上まも詔まなゝの翁ぞ手にとゐり○子まとも」ハ類本子まて也字ハな
し〳〵有ま役〳〵補諸本子まも〳〵〳〵○山まて見付ふるかゝれぞ」ハ按
本ま見付〳〵ゐるとゐてよゝれど本の仮まて聞ゆれバゆゝゝゝ下ま
子に〳〵ゐりと詞を加〳〵心得べし上ま子に〳〵も非ゝ〳〵ゐて其意能

聞ゆれバ畧なふなり上まそやもて辞なゝてふる〳〵結ふるて下ま
意を含〳〵る言なる叟言玉緒ま変格と云れふる類なりかゝれぞを
諸本ゑ付〳〵るゝかまハと作ふるハ〻字一濁〳〵上ま着て下を彼者
と云意ま取〳〵る〳〵めど此ハ如此有故なれぞの意と聞ゆふり○こ
こゝだせもハ天武紀十一年八月癸酉詔ま凡諸應考選者能撿其族姓及景迹
方後考之若雖景迹行能灼然其族姓不定者不在考選之色とあるを
考證に景迹考課令ま凡定官人景迹功過義解ま景迹者景状也狩言
状迹也選叙令ま凡應選者皆審状迹義解ま謂考中功過謂之状也履
行善悪謂之迹也行能考課令ま功過行能義解ま善悪為行才藝為能
古今物名ま「いさ〳〵めま時待聞まぞ日ハ経ぬる心ぞせをバ人ま見ま

〻心アヒと訳しまち。明石巻ヨ明石上のさまを聞給ふ処ヨ事に觸て心ざせ行さまなべて〻ゆゑ〻有る哉と思ふ給へ合はせ給ふ類本〻ハ心操と作ヒ○世ハ人ヨ不似ぞ侍るハ變化の者なれバ心さまも常人の如〻ハあらぬとなり○奏せさせたハ翁云〻〻申給へとまゐらせる由なり

みのぶと仰せあるこそ〻ハ山がちの〻なるヒ御狩りしまちのまはまぶ〻に〻ゑてすやと沼のまハす

○山本ちの〻なるハ諸本ちう〻なりとあハ〻の重点を長く引く竟ヨくに轉ずるヨと故改つ。帝大御心〻推量定〻詔給ヨ御命なヒ。拶ヨ斯〻聞ハすれど若ハ之りを誤まるもなれ〻の○御狩の行幸ハ抄本御狩〻とあるを校本の〻ヨ従つ野の行幸なれ〻ハ例ヨ普本類本〻ハ脱ちり。行幸を古〻ハいでまゐと云ヒ古事記〻ハ行幸と書て然訓ヒ傳巻六巻十一可考幸字みゆきと云ハ古事記朝倉宮段ヨハ天武の義ハ續古史談第二ヨ〻〻ちり

紀七年ヨ鹵簿令義解ヨ鹵楯也簿文籍也傳に漢官儀云天子車駕次第謂之鹵簿兵衛以甲盾居外爲前導皆著之簿故曰鹵簿と

〻〻ちをこちの記のち〻と訓ヒ師傳巻卅二云万葉ヨ吾行なれ〻ハ天皇のいでゝ御行と云つゝ〻と云ヒ〻〻ちり。古ハ雄略天皇四年八月の吉野ヨ御狩今の京ゐ〻ハ交野芳生野など御狩繁のちしを思べし○詔賜ちに〻ハ帝の御命を奏者をして令宣給ふなり。翁の家ハ山本近く在ばいらせバ御狩の行幸ヨ准へ〻出坐て赫映姫不慮なる處ヨ到て見てなる〻ことの御計事なり。然しなれひてハ如何と翁ゞ心を問し

えうなるよなるを
こゝろつくしまゝにつゞの申やうゝいとよはくなり何うとて詠もなく
ゝ侍るゝもよふなることゝまゝ御覽ぜられなむと奏すれば
○何の心もなくて」ハ古板本ハ心もとなくとゝもハ衍なり。鈴木氏云
何のとハ心もなくと云よ同じと云れも。彼是と思慮分別もなく不意
なる処よ於そし坐ゝ御覽ぜられよとなり○ふと」ハ俗ゝ千ヨットと
云意なる叟上よ云き○古板本写本に行幸ゝて御覽ぜん御覽ぜ
ばとゝもハ衍なり
立帰りよのねをさぐめゝ侍るよ出れひゝかゞゝや姫の家よ
入ゝるまひて見れふよ光ゝるゝけゝるゝて居る人あると見

なゝまゝ於ゝ行ゝゝ近ゝよゝも於ふ逃ゝる袖をとゝゝ
ふまゝゝで面をふゝ於ゝゝとゝふゝゝ姫よゝく侍るじ侍まばゝゝ
ひなゝくゝえゝてゝゝ扨ゝゝみゝゝ於ひゝてゝゝゝ於
ゝゝはゝゝまゝとするゝ
○ふとのに」ハ急卒よなり思し立ゝ日數の間もなゝ御狩ゝ日を定
於ふなり○是なゝむと思ゝて」ハ其光ある人を是ゝ赫映姫なるぼ
記と推量に定於ひゝなり○ちのくよゝせ於ふよ」此一句諸本よ漏
もる於写本よ從ゝ補つ○袖をとゝ於ゝ」ハ類本よ袖を取ゝ於
とゝ於ゝゝ何ゝ校本於ゝまゝ○於もてを塞てさゝゝゝと」
校本ゝゝゝ片袖もて面を覆ひ隠をしなり○あゝひなゝえゝる

く於ぶゑさせ給ひ〻い何の心もなくて居る間ゟ此姫の顔貌端正ゟ〻く世に比類なし〻〻熟〻御覧じて御心ゟ能思し知給ひしなり

○ゆるさじ〻たてまつり此云〻と云更下天羽衣の段に云べし〻てハ空のふまひてと云を略る言なり○みてハ引率て大内ゟ還幸あさすと志給ふなり

かぐやひめ答〻申〻たまふものゝ分ハ此國ゟうまれ給はべらぬこゝてしたのひくみゆえあいなみ〻なく於そしかゞゝやそべ給すゝこゝに

○此國ゟ生れて侍ゝぞこゝ云〻ハ赫映姫此國の人ゟ胎ゟ孕れて生るなゝバ此國王の仰ゟ不違隨ひ奉べき更なれど我ハ不然で隨ひ侍ゝたゝなり○みておそしかゞゝやゝハ率て御そさんとすゝも然ハえゝ給そじと申て率て御そさんとをバ消云ぬの下心あるよしなり

こかどなぶとこのさら所ゝ獨みゝ御そしまさむとて御薬をよせ給ふゟ此かぐやひめきとかぐるゟ給ぬたこのおくゝろをしと於ぼせどげゟゑぐ人まこの所ゝもこゝゟハみゝ〻ゟのじをぶこゝ於ぶゝてせこゝバ御ゝもこゝゟハみゝ〻ゟのじをぶこゝ於ぶゝてせこゝバだゟ御なまこと仰らゝ給ぶかぐやひめもゝこのこゝろなるなり

○なゝこのさら所ゝまこハ姫の率て御そし難くやと奏る御答みゝく強て於そさまとし給ふなり○此ハ彼の意なり○きとハ俗ゟ手

ヤット 此言ハ便字をけやくと訓る古言の訛ふるみくけやとの約きるなるべしと千村君の泳宮考ヨ言加へ置つるを考べしと云意と聞也。稲直ご俗ヨギッキニと云意と云るもちし。讃岐典侍日記ヨ局より急ふる氣色みくきと抑えしませ三位藤三位殿絶入らを於ひぬと云云云。著聞集に坊門院ヨ年來召けるのふ蒔繪師ありけと仰らるばヨ更みくきと參きと仰ふりきをバ。宇治拾遺巻三ヨ定頼中納言云云經をはふと打拳て誦ふりけと云云小式部内侍きと耳を立ふやくにたふきバなごりの影に成ぬハ帝強ヨ率くおえさんと云御輿を寄ふヨ依く今ハ遁ヨ方なくて影ヨ化く形躰を消べくきるなり。上ヨ消亡なんずと云るもかくふ術あをバなり。平家物語青山の段ヨ簾承武ご靈ヨ顕るくを影の如なる者村上帝の御前ヨ參じて唱歌をも

でくく仕ると有ヨ同じさはなるべし○たとのれくハ師答問錄説ヨ妹のり吾ごのりと云言ハ如何イカニと道全ご問ふり答をけるやく此ごと云言ハそのをを約くるなりたを畧ごがをごと約云なりさてたのりとハ後撰恋ヨ中將更衣罷出て御二ヨ文遣しふりけルバ今日過バ死ミヌまし物を夢ヨて も何處イヅクとそこのと君ハ問ハヌまし返し延喜御製あり。伊勢物語廿段ヨ何處をたのると も覚ざりけをバなごりのるたこのと同じく其行ユクあて所を云と云をふり。此を以按ヨそこのとなくと云たこのも同意ヨて何処へ行べきとも當所アテドなき更ふく徒然草に云るも何更を書記カキシルスとも定メふる更なる意ヨり然サハ量字議字も本同意ヨく定カヘを云バたとのなしと云も定もなく當もなき意を本ヨく漸ヤウヤクヨ轉クリくハ取締なヨ意本意の不達

意又假初なる意死更なも云ふ此ハ慥ニ取所もなき由なり○くちをしとハ俗ニ残念ナリと云意なり○於保しての下聊詞脱ぬる○又ハ姑然訓く在べし○げニハ赫映姫ハ変化の物なる由ハ兼ねも聞食知坐ばど今かく影と成るに就て弥凡人なるぬ更を思食知ばニ由なり○さるべでハ率行ばそんとハ影ニ成るあ然計ニ辭となるバ率行更ハ志ばをじとなり○御許ニハ諸本御字もとなのまで写本ニ役く改つ御もとハ御所なり○本の御形と成ばひ絲ハ古本御字なし校本形ニとなり○其を見てぶるまくハ今を率く知ばる更かなるるバ本の形體ぶニ見て還らはるとと思食ばしを詔ハバ影と化まるしぶ又本の躰と成る

ニなるもるる

帝なる係るぶるかく知ばしめるるまをばるあ難しかく見るるふこるりとまるるびるるびばるさて仕まる百年ばる人くくなるるしいのくくはるるのくまるふ

○猶めぶるくハ影と変るぶの再本體ニ成ばば更ニ改るくるぶ

るくく思食由なり○塞止ぶるくしハいのぶ率行ずと思食御心の進ニ

ばひけるぶも率行難ばば唯めぶるくしと思食御心ば塞止難しと

云る面白し裏の意ハいのぶくと思食心の進むぶの塞止ぶるニ由なり

○かくくるるふ造麻呂を悦ばるハ造麻呂ぶの議て行幸ば更を姫ニ

不令知熟く爲ばて帝ニ見せ奉ばると甚く喜びばるなり○百

官の人々」は抄本百官人々に写本百官人の類本百官人々は字なしなど有るの字无を今補つ。職原抄は孝徳天皇大化五年始置八省百官なりの必百の負數々は非ども數の多き義なりとぞ。古事記朝倉宮段に一時天皇登幸葛城山之時百官人等云々とあるに似たり然ども此は字音は唱べし百官の字は明宮段より出たり鹵簿は仕奉し人々なり○あるじは主人と云言なるを轉て主人の礼をなして客をもてなし饗膳を設ると云ふ○いのめしは師記傳卅二云いのしに嚴重茂字を書て右三字を合て心得べし物語書どもに吏の壯は大は麗き吏をいのもしと云る是なりと云ふなり

ふるのぶるかぶるやゆ姫をもとめ給ふ

おもしろしけまどゐのぶるかぶるやゆ姫をもとめ給ふ

かつらをかけたるかぶるとしよりめかつらにのぶるやゆ姫

ゆるさるる物なく物も係ずてそもまゝ心ゆるさるかぶる

やゆ姫をもとめ給ふ

むだ〳〵はふかする年は強ぬる多の何のは巫女なるなる

もつなり

一

○赫映姫を止るは率行すとも隨ちゝは為便なく置て還る

ん〳〵ふかなり○あるのぶるは不飽不足なるは意なり○おぶしけ

ずるは帰るなふと云言一係まち○魂を止る心ちしては御製に

含ふる意を先此は書顯をるなり。万葉十二は「山菅の不止く公を思へ

この心神之此頃となき解ハ心利のと訓ス。古今雑下ハ陸奥飽さうし袖の中
うや入うりむ我魂の无こうちするとらある此ハ似ふり○於ハ
興ハ」ハ諸本御抄本おん」となるを不字を補つ。大御と云言ハ音便ハ
轉ふるおくおん」と云も其ゆゑ約をるなり。抑大御と云吏古ハ天
皇の御上りはと申しのど神ハも甚太尊ハ申と知べし記傳十一可考音便ハ頻くハふび
一通の敬言となれるゆり○奉てハ貴人を敬く俗ハメサセニスと
云意ハく衣車船などに云ス。夕見巻ハ狩の御衣を奉ス。若紫巻ハ御
車に奉る程。明石巻ハ夜の明もてぬ前ハ御舟ハ奉ればなどなるス
○赫映姫ハ」とのと云く製て賜ふと云言を省りり○哥かつふをの
こあき」ハ還幸なり。師説ハ行幸を伊傳坐と云語の本ハ出る意ハ云

つふるも有べりれど必さうでも唯往ふるも來ふるも云ス今
ハ俗言ハ御出と云を往ハも來ハも用るも同一意ぞへなるスと云れ
ふり。此も還ふるハ宮ゝ入ふるなれバ然云ハじきの如なれども右
の説ハ準ゝ心得べし。抑此歌末句を始ハ回ゝ閑ゝ鈴木氏云背
向て止ゝハ赫映姫帝ハ真ゐゝハ向奉らで後の方を向ゝ立止と詔
ふるなり斯ゝ次の詞にいふ帰ふるも空もなくと云る能叶ふス
と云れき。かゝ天皇の命ハ不隨家ハ止ふる赫映姫故ハ還御の行幸
を物うく出立ふひ難く思食て」と詔ひ終ゝ御魂を止ふるハ御心持ハ
せもそもふゝ申意を含しるなり物うくハ古今春上ハ春立と花も白
くぬ山里ハ物うこの音ハ鶯のなくとあるを師ハ鳴トモナサウナと

譯さ〻れ契冲法師ハ文集ヨ花寒懶發鳥慵啼とあるを引きて字書ヨ懶落蓋切音賴憎懶嫌惡也慵蜀容切晉鏞懶也〻のとて字中ヨ有ものも結句ヨ有も同意ヨ〻所謂て止た〻止ヨ歌〻もの意を云不盡言外ニ含ふる格なり能〻心を著てし。さて然含ふる意を前の詞ヨ先云置て歌〻ハ省くいくぬ文ヨ工甚めでゝし○御返事ヨハ写本ヨ役〻を字ヨ補つ帝の御歌ヨ処ヨ赫映姫ヨ〻ゝヨ附〻〻〻周也ゝり並〻ハ文の答を返事と云歌の和を返しと云とされと伊勢物語十九段ヨ蝦手ヨ紅葉の甚面白きを折て女の許ヨ道より云やる君の為手折きる枝ハ春ヲかくこゝ秋の紅葉さるにれとて遣ふりけれバ返事ハ京ヨ著てなんもて来ふりける。いつの間ヨ移ふ色の

附ぬ〻ヨ君の里ヨ〻春なのゝ〻しと有ハ歌の和を返事と云る此ヨ同じ。又枕冊子ヨ行成卿餅餤を贈きる答ゝ唯返しをいとじ〻赤き薄様に云〻自ヨ〻でゝぬ下部ハ甚きんゝなりとゝん見ゆる〻〻紅梅ヨ付〻奉るゝゝハ消息文を返と云ヒ○哥むゝ〻はふ下ゝも云〻ハ六帖第六草部ヨ何きんヨ玉の臺も八重葎ちふ〻ん中に二人こゝ寢めと伺る歌の意詞を〻れを。帝の率〻おゝさんとちれよヨ就〻御答申せふやゝ自已ハ葎の延繁〻る下ヨ賤しき伏屋ヨも年經〻斯住馴伯し身なる物を今更何しヨ玉臺の美麗しき御殿ヨ參〻ゝ更を願ゝむやゝとなるゝ葎ハ和名抄ヨハ本草云葎草上音律和名毛久良〻ゝを万葉四の五十四丁ヨ年具良布能嶽屋戸介〻。又十九の卅四丁年具良波布伊也之伎屋戸毋云〻

〻みさとて此六帖歌ハ万葉十一なる玉敷有家毛何将為八重六倉覆小屋
毛妹與居者結句之の旦の脱〻なるを誤〻傳〻るこの第四句本文
〻〻〻〻ハ必誤と見ゆ然ハ延と改つ又生は誤なるべ〻〻の
是を帝御覧じて〻ふ〻ぶ〻笑ひ給ふ〻〻なく〻おぼさ〻
御心ハ〻〻〻と〻〻べ〻〻も於ぼさざるけまでにて〻
を〻〻〻〻〻べ〻たり。あ〻〻ぶかく〻を〻ひぬ
○是を御覧じて〻とあるハ返し歌ハ赫映姫口自奏ふ〻〻と思へど
かく〻ハ物に書て獻ふ〻るなりけを○いたづら帰〻ん空も〻く〻い
帝御心に還幸を懶ふ〻〻ふ上に又一つ事ありて弥留ら〻く思食由にて
いたづらと云ひ。其ハ此歌を奉ふ〻るを御覧じ〻る故なり。按に彼本

歌の八重葎這ふ〻ん中に二人〻〻て休め〻〻を思召〻又更に止〻に
ほ〻〻思成給ひ〻〻玉臺に帰給ふ〻も此姫なく〻てもかひなく思食
く彼歌と共に唱習ふ〻べ六帖に並載〻り葎生て荒ふる宿の恋しきに玉と
造ふる宿も忘ぬと云歌の意に成給ひ〻〻此竹取の賤〻き宿に〻
も迫て一夜だに御寝ず〻て帰給ひ〻〻て夜を更し給ふ〻ふ〻
ほに執成ふる工い〻〻面白し心を著べ〻〻さて此六帖歌を思し依て帰
難く〻給ふ由を今知ふ〻て本歌の詞を皆取く唯末一句を残し
ふ〻る所帝ハ却て其結句に二人〻〻て寝めと有るを思食たき〻いたづら帰難く思
ほす由なり。斯て赫映姫も帝の本意なく還出給ふを欺〻る意を含
く作ふ〻ふまなり。空もなく〻ハ氣を失ひ〻〻る〻〻なる処に云ひ家持

集と云物は天漢帰らぬ空も思ひ〳〵に不絶別と思物の〵明石巻に
天変の条に末に　家を離境を去る〳〵明暮安き空なく歎れつゝ宇治拾遺巻三は
虎の難を除る処〵　肝心失〳〵船漕空もなくてなど有るに○御心をこゝに
なく帰の〵くもゐを供奉せし人の勸めけるさまに〳〵ことみに
きるし○さて〳〵て夜を明しかねぬ。有〳〵孫だに類本は役〳〵
も字を補つ甚いとも〳〵帰のてゝ〳〵夜の更るさまに此詞〵
〵も〵〵なり
少〳〵はこの〵まつる人を見れば〵かるゝ姫の傍によるべくだは
有〳〵どもとりこふけ〵なりとおぼしたる人の
かまへ〵思〵あるに〳〵バ人〵も有〳〵どもおぼしに

この〵〵ゆゞしく〵なる〵〵ほど方〵〵なる〵〵
〵みまとゞ

○赫映姫の傍は寄〵〵ぶる非をたりは按本寄べくも〵有り。師の
玉勝間巻八は此詞の更を俗語は物を競てこゝの〵〵劣きるとそゞ〵
もよ〵ぬと云は同しと云れつゝ。紅葉賀巻は源君と頭中将立並て舞ふ処は
は花源氏を　の傍は深山木頭中将なり。嵯峨院巻は仲頼右大将の饗應
る処　いと〵〵めで〵〵有るも光赫〵〵なる中に天女の降る
ふゝ〵なる人あり仲頼是は此世間は名立る九君有て家は帰て病
と思よりて見るはせん方なし云〵て家は帰て病
〵思し妻も物〵も扨ぶえ〵片時もこゝ〵バ恋〵〵悲〵〵思〵も

前より向ひ居ふ程ども目のもふ〳〵とぞ云〻と人より云〻と宇治拾遺巻に六
羅刹女を南天竺王のそふる処より帝御覧ずるに云ふ方なく美つくしし若干の女御后
を御覧じ競るに皆土塊の如し昱ハ玉の如しなど似たる更なり○
唯獨すまし〻ふハ抄本に従つ大伴大納言本の妻どもを追拂ふ獨
明し暮し給ふと有同し意ぞ〻なり宇治拾遺巻九に美濃國の人妻よみくれてやも
めゐ〻過しけるぞ〻にのり写本に獨すまし給ふと類本の異なり何り其
も宜し幻巻に紫上卒去の後獨住ハ殊よかるふ更なけれどこゝに何り類本すぐ
れたり
ハ悪し○そしなくて」ハ徒なと云ふどの如し○御方〻なも渡給ふ
ハ赫映姫のこ御心に掛まく清らと思し〻人ぶる人なも非ぬ如く
思して后女御の御方〻に御婚すに更もなく常に來通坐けるを今

ハ何ぞ御用なぞ〻ハ渡給ふ更もなしと給ふ。幻巻に紫上卒去の後絶
〻御方〻なも渡給ふぞ云〻御獨寝に成てそ〻にのり
かゝる程姫のもとにまゐ給ふ御文を書給ふ御歌
さらぬだに惜の〻に聞〻かなし給ひて於も〻なほ不安給ふ
て〻も御歌をよみて侍るのそ〻に
○赫映姫の御許にぞ」ハ外に御方〻ハ渡給ふに赫映姫ぞ〻にのり。
常に此姫に御心を掛給へぞ〻御婚坐にをかなへ給ふ迫〻ハ御文を
通ふし給ふなり○御返事」ハ諸本此に事字なしを校本に有ハ補る
この○さらぬだに」ハ姫を率往ふ〻ものを影に成なぞ帝を強顔にて奉
侍るぞ〻もさらぬだに文通ふ〻に然ぞとのり憎ら〻くハもてなしま

[illegible]の解ハ上玉枝の段ニ委云つ○聞えかゝ[illegible]ハ
専姫の方ニ係り○面白き木草にはあれ[illegible]ハ木草ハ花紅葉ニよ
[illegible]もなり。桐壺巻ニ源君藤壺女御に睦れ[illegible]ニ幼き心ちにもたゞなら[illegible]花紅
葉ニはゝそれも心ざし[illegible]を見[illegible]ありつるなり心を聞[illegible]ハ[illegible]
生巻ニ蓬生君の叟を[illegible]又いとゞ叟なき程ハ同心なる文通をし
なども打[illegible]ゝ若き人ハ木草ニ附[illegible]も心を慰め[illegible]
云[illegible]なり玉の小櫛二の四丁ニ物の[illegible]云叟の條ニ春夏秋
冬時々の花鳥月雪ハ類をあつ[illegible]きさまに書顯をるなど源氏物語の叟なり
是皆人ハ心を動[illegible]ハ[illegible]思[illegible]る物ニ心ニ思叟[illegible]る時ハ
殊ニ空の氣色木草ハ色も[illegible]を催[illegible]

と云ハ[illegible]を思べし諸本[illegible]ニ従ひ改き○御歌
をもとゝしたのハすハ姫の方へ木草の花などにより[illegible]御製を遣
[illegible]なり

追考

○廿四丁右 赫映姫ハ[illegible]ハ[illegible]の[illegible]歌[illegible]ハ姫の贈[illegible]を受る
中納言の方ニ付て云言なり。[illegible]ハ彼方より此方に[illegible]との
云をハ[illegible]と云言ハ此方より[illegible]ニ云ハ已の態を口自云な
ニ又彼方より贈を受る方ニて[illegible]然云ハ即彼方の態を此方ニ云
詞なり。後撰恋三ニ[illegible]使る東の方へ罷る程ニ始て相知る
[illegible]女ニ[illegible]止叟なき道ハ[illegible]で罷ぬるなど申て下[illegible]を

後ヨ敕使を他人ヨ改定ちゝ吏ヨて召返さるるまバ此女悦なのゝ諸実方へ
問にけるのそしゝりけまバ道ヨゝ人の志贈て侍りる呉服〻云綾を
二端包〻女の許ヨけるの〻しける清原諸實ゝ〻ゝゝ綾ヨ恋〻〻有し
のゞ二村山も不越成ヨき此ヨ女の問ヨけるのそしゝと云ひ又慶賀典侍
明子父孰忠の宰相ヨ爲ヨ賀し侍りるゝ玄朝法師の裳唐衣縫〻けるの
そしゝりゝ〻ゝバ明子雲別る天の羽衣打著てハ君ゝの千歳ヨ侍のなゞ
ちゝゝやそなゞゝゝを以さるゞ〻〻〇卅一丁左此をさなき者ハ大和物語菟原
美女の段ヨ親の云やう誰も志の同様なるバ此をゝゝゝよものなん思煩
ゝゝ侍るなゞ云る今世我子を悴ヒと云同〻意ゞ〻ゝゝゞ云けま

竹取翁物語解巻四